



Data

監督：スザンナ・ホワイト
原作：ジョン・ル・カレ『われらが背きし者』（岩波書店刊）
出演：ユアン・マクレガー／ステラ・スカルスガルド／ダミアン・ルイス／ナオミ・ハリス／ジェレミー・ノーサム／ハリド・アブダラ／マーク・ゲイティス

👁️👁️ みどころ

スパイ小説の大家、ジョン・ル・カレの原作の映画化なら、複雑難解はやむをえないが、先が読めず手に汗を握るスリリングな展開に！

そう予想したが、「巻き込まれ型」サスペンスの典型たる本作は意外と平凡で、先が読める展開に・・・。

しかし、亡命を求める準主役級の資金洗浄屋の男が魅力的！しかも、マネーロンダリング（資金洗浄）のテーマはいかにもタイムリー。それだけで問題提起力が強いから、少し甘めだが星4つに・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■原作者はあのジョン・ル・カレ！テーマは資金洗浄！■

1950～60年代の東西冷戦時代のスパイ映画の名作中の名作『寒い国から帰ったスパイ』（65年）の原作者であるジョン・ル・カレは、今なおスパイ小説を書き続けているらしい。『裏切りのサーカス』（11年）はその代表で、エンタメ色が強い『007』シリーズやアクション色が強い『ボーン』シリーズとは異質の、本格的スパイ映画の醍醐味を堪能することができた（『シネマルーム28』114頁参照）。

スパイの仕事は時代とともに大きく変容するから、本作のパンフレットにある手嶋龍一氏（外交ジャーナリスト・作家）の「ジョン・ル・カレの世界—特異な少年時代を過ごしたスパイ作家—」によれば、ベルリンの壁が崩壊すると、「さしものル・カレも失職せざるを得まい」と囁かれたらしい。ところが、父親が詐欺師だったというジョン・ル・カレは、そんな大きな負の遺産を抱えたうえ、イギリス外交官の衣をまといながらスパイとしての情報戦に身を置き、さらに現役のままスパイ小説を発表し続け、その後も東西冷戦後の謀

報戦を新たなテーマで鮮やかに書き続けたらしい。

しかして、今もっとも旬な諜報戦のテーマは？それは「パナマ文書」が世界的大問題になった資金洗浄。それに目をつけた作家ジョン・ル・カレは、ロンドン大学の詩学教授のペリー（ユアン・マクレガー）と巨額の資金洗浄を長年続けてきたロシア・マフィアのディマ（ステラン・スカルスガルド）の2人を主人公として、資金洗浄をめぐるリアルな物語を提示することに。そんな本作のタイトルは『われらが背きし者』だが、さてその意味は？

■□■典型的な「巻き込まれ型」だが、ちょっと甘すぎ？■□■

パンフレットにある川本三郎氏（評論家）の「二人は、なぜ、彼を助けたのか」によれば、サスペンス映画の基本の型を大別すると、「シーク・アンド・ファインド型」（消えた人間の行方を探す）と「巻き込まれ型」（一個人が事件に巻き込まれ、組織に追われる）の2つがあるらしい。そして、本作は典型的な「巻き込まれ型」だ。

本作は冒頭でロシア・マフィアのある残酷な現実をリアルに見せつけた後、モロッコに旅行に来ている倦怠期にあるらしい大学教授のペリーと法廷弁護士のゲイル（ナオミ・ハリス）夫婦の姿が描かれる。大学教授と弁護士ではどちらが格上かという普通は大学教授だと思うのだが、この夫婦ではどうもやり手弁護士の妻の方が詩学を教えている物静かな大学教授の夫より上らしい。したがって、せつかく2人で倦怠期を癒すための旅行に来ていても、仕事の電話がかかってくるとゲイルはペリーを待たせて平気で席を外している。一人ペリーだけがテーブルに残された姿を見て「我々と一緒に飲まないか」と声をかけてきたのが、大柄で陽気な男ディマ。ディマは長年マネーロンダリング（資金洗浄）をやってきたロシア・マフィアの大物らしく、不思議な魅力を持った男で、誘い方もうまい。いい女がいたこともあってその夜はしこたま飲んだペリーは、翌日も妻と一緒にディマの娘の誕生パーティーに誘われて断ることができず、「じゃ、ちょっとだけ」と豪華なパーティーに出席したところ、そこでディマからとんでもないことを頼まれることに・・・。

こんな「巻き込まれ劇」を見ていると、なぜハッキリ断れないの？つい、イライラしてしまう。誰がどう見ても、したたかなディマに対してペリーの甘さが目立っているが、このように何となくズルズルと巻き込まれていくところが、「巻き込まれ型」サスペンスの真骨頂・・・。

■□■この情報と引き換えに家族の保護を！■□■

中国では習近平国家主席が展開してきた「腐敗撲滅運動」の中で薄熙来（党中央政治局委員、重慶市共産党委員会書記）、令計画（党中央弁公庁主任）、周永康（党政治局常務委員）、郭伯雄（前党中央軍事委員会副主席）、徐才厚（前党中央軍事委員会委副主席）らが次々と標的にされ処罰されたが、彼らは一様に家族や財産を中国から国外に移していたら

しい。それと同じように (?)、本作で新しいボスに命を狙われているというディマがペリーを通じてイギリスのMI 6 (イギリス秘密情報部) に申し出たのは、イギリスの下院議員オーブリー・ロングリッグ (ジェレミー・ノーサム) らが絡んだ資金洗浄の情報提供と引き換えに、ディマとディマの家族の保護 (具体的にはイギリスへの亡命) だ。

ディマがペリーに預けたUSBの中にはその機密情報が入っているので、ペリーはそれをモロッコからイギリスに帰国した時にMI 6に手渡すだけ。いわゆる「運び屋」の役割をペリーは妻のゲイルに内緒で引き受けたわけだ。本作ではそこでもペリーの甘さが顕著だし、イギリスに帰国した早々空港で尋問を受ける風景を見ている、ペリーの甘さが顕著だ。ディマから手渡すことを頼まれたUSBをMI 6のヘクター (ダミアン・ルイス) に引き渡し、自分は運び屋にすぎないことを納得してもらえば、ペリーの役割はそれで終わり。ペリーは再び穏やかな大学教授の仕事に戻るはずだったが、事態はそれ以降も意外な展開を見せ、ペリーは渋々新たな事態に巻き込まれていくことに……。

■□■駆け引きは必要だが、信頼は……?■□■

イギリスの政治家が絡んだ資金洗浄の情報、具体的には個人名と個人口座が明らかになれば、それは大事件、大スキャンダルだ。いわば、パナマ文書のうちのイギリスの部分だけが明らかにされるわけだから、その情報の価値は大きい。ロングリッグ議員によって自分の息子がハメられたと信じているヘクターは、個人的な復讐も含めてペリーからもらされた情報の解明に意欲を燃やしたが、さてMI 6の上層部は……?

イギリスは今のヨーロッパの中では経済的に最も中国と深くつながった国になっているため、東アジア、東南アジアにおける中国の横暴 (覇権追及) について寛容になっている。また、カネに色がついているわけではないから、中国から投資してくるカネがキレイなカネか汚いカネかに関係なく、国益に利すればOK。今やイギリスはそんな風潮の国になっていることが、本作におけるMI 6の裏側を見れば少しずつわかってくる。ヘクターはMI 6のそんな上層部の意向と闘いながらディマと交渉を進め、ディマとディマの家族の安全確保を約束したが、そのたびにペリーの協力も要請 (要求?) してきたから、ペリーはウンザリ。ヘクターはディマといろいろ交渉していたが、それはすべてペリーの頭ごし。そこにさまざまな駆け引きが必要なのは当然だが、同時に必要なのは信頼。しかし、ペリーとディマの間には信頼があるが、ヘクターとディマとの間に信頼はあるの……?

そんな状況下、ヘクターがフランスでディマと交渉するについてディマがペリーの同席を望んでいると言われると、仕方なくペリーのみならずゲイルも一緒にフランスへ同行することに。一民間人にすぎないペリーとゲイルが、なぜそこまでやらなければならないの? いくら巻き込まれ型の典型とはいえ、そこらあたりの不自然さが中盤以降もずっと続いていくことに……。

■□■亡命拒否！仕方なくスイスへ！その顛末は？■□■

イギリスへの亡命を認める代わりに、ホントに役に立つ情報を見せる！それがヘクターのディマに対する要求だが、問題はそれがMI 6の上層部の意向に沿ったものか、それともヘクターの個人的な判断だったのかということだ。その結果、マフィアの監視下で緊張感いっぱいのヘクターとの会談を成功させ、ディマとディマの家族を乗せた飛行機が今にもイギリスに飛び立とうという状況になったが、その直前にMI 6の上層部から亡命の許可が出ないことになったから万事休す。その苦境の中ヘクターが選んだ道は、とりあえずディマとディマの家族をスイスの隠れ家に隠すという窮余の策だったから、当然ペリーとゲイルも一緒にスイスへ。「巻き込まれ型」がここまで拡大してくると、さすがにジョン・ル・カレの原作にも少し疑問が・・・。

他方、隠れ家に入ったディマの年頃の娘がロシア・マフィアの彼氏に電話連絡をしたことによって、隠れ家にも危機が訪れてくる展開は少し甘すぎる。また、今まで拳銃など持ったことのないペリーが、突然プロの戦いの中に入って拳銃でディマを助ける展開も少し不自然だ。更に、襲撃をしのいだ後、先にディマだけがへりて出発し、ペリーがそれを見送るシーンを見ながら、その後のシーンはきつこうなるだろうと予測していると、案の定・・・。

ジョン・ル・カレの原作は『寒い国から帰ったスパイ』も『裏切りのサーカス』も複雑で難解なのが特徴だったが、巻き込まれ型の典型である本作は何ともわかりやすい。しかし、スパイ映画にとってそれはあまり良いことではなく、マイナス要因では・・・。

■□■ラストの「オチ」もミエミエ・・・？主役はどっち？■□■

前述したように、本作冒頭はロシア・マフィアの残忍さを示すシーンが提示されるが、逆にそこでは美しい彫刻の入った拳銃を愛でるシーンも印象的。「俺はこの拳銃の美しさが好きだ」というディマのセリフはロシア・マフィアには似つかわしくないが、本作ではケース入りのそんな美しい拳銃が中盤でもラストでも重要な小道具として効いてくるので、それに注目！

ペリー役を演じたユアン・マクレガーは『スター・ウォーズ』新3部作（99年、02年、05年）の若き日のオビ=ワン・ケノービ役で一躍スターになったが、『ムーラン・ルージュ』（01年）（『シネマルーム1』17頁参照）、『ゴーストライター』（10年）（『シネマルーム27』143頁参照）での演技は光っていた。しかし、本作に見るユアン・マクレガーの演技は「巻き込まれ型」に徹しているためか、あまりに控え目すぎ・・・？それに対して、『ドッグヴィル』（03年）（『シネマルーム4』135頁参照）、『メランコリア』（11年）（『シネマルーム28』169頁参照）、『ニンフォマニアック V o l . 1 / V o l . 2』（13年）（『シネマルーム33』91頁参照）等のラース・フォン・トリアー

監督作の常連で、かつハリウッド映画にも多数出演、そして何よりも『ドラゴン・タトゥーの女』（11年）（『シネマルーム28』37頁参照）でのちょっと変態的な演技（?）が光っていたスウェーデン生まれで私と同じ年代の俳優ステラン・スカルスガルドが、本作では準主役の立場ながら主役のユアン・マクレガーを喰ってしまうような存在感を見せ、ある時点までのストーリーをぐいぐい引っ張っていくのでそれに注目！

ちなみに、見るからに怪しげな大男のディマをペリーが信用したのは、クレジットカードの番号を一目見て暗記してしまう能力に惚れたため（?）だが、ディマはそんな能力をどうやって育成したの？本作ラストでは、そんな「秘密」がペリー宛てに届いたあのケース入りの美しい拳銃をヘクターが持ってきてくれたことによって明らかになるので、それに注目！もっとも、ペリーがそのケースを開きしげしげと拳銃を見ているシーンからはその後の展開が私にもさっと読めたから、この作り方はちょっとミエミエ……。その点でも少し甘いと言わざるをえない。しかし、今最も旬なマネーロンダリング（資金洗浄）をテーマにしたジョン・ル・カレ原作の「巻き込まれ型」サスペンス映画の典型と言うことで、少し甘いが星4つにしておこう。

2016（平成28）年11月5日記